

授業連携によるクラスループリック作成過程の事例

毛利 美穂*、西浦 真喜子*、小林 至道*、中澤 務[†]、森 朋子*

*関西大学 教育推進部, [†]関西大学 文学部

1. はじめに

ループリックは、採点時間を節約し、学生に効果的なフィードバックを与え、かつ学習を促進する評価ツールである。客観的な指標によって評価のズレを抑止するとともに学習成果を可視化することができる。高等教育における、教授（ティーチング）から学習（ラーニング）への転換に伴い、2012年中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」では評価の明確化が提示された。このような社会的背景から、大学におけるループリックの導入も広がりを見せており、関西大学と津田塾大学の連携取組「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」においても、取組の柱の一つとして評価指標（ループリック）の確立を掲げている。

本発表では、「〈書く力〉をめぐる評価指標」開発において、関西大学で取り組んだ共通教養科目「文章力をみがく」クラスループリック作成過程の事例を報告する。

2. ループリック作成のプロセス・体制

ループリックの作成手順は、①事前に予想される学習者の行動・学習の過程を可能な限り可視化（リストアップ）し、②複数の教員（できれば3～4名）の合議によって、リストアップしたパターンから、評価の観点、達成の度合いを示す尺度、それぞれの尺度に見られるパフォーマンスの特徴を示した記述語を練り上げ（高浦 2004）、③それらの作業を進めながら尺度の各項目を作成し、さらに新しいパターンが生まれた場合は、ループリックに追加する作業を継続していくことが一般的である（松下 2007）。

以上のプロセスを実行するために、本学では専任教員1名と特任教員3名での体制を敷いた。ループリックの作成はこの4名が主に担当し、検証のための教員、レポート提供およびモデルクラスの担当教員など、作成から検証までの各段階に応じて幅広く協力者を募り、作業を進めた。作成者や評価者の人数に関しては、評価の信頼性を確保するため、3～4名に定めた（松下 2014）。

3. 共通教養科目「文章力をみがく」の概要

共通教養科目「文章力をみがく」は、複数の教員が同一科目を担当するチームティーチング方式で行われ、2014年度の開講クラス数は、春学期12クラス、秋学期12クラスであり、2015年度も同様の数となる予定である。なお、作成メンバーの専任教員は、2014年度当該科目担当者であり、その担当クラスをモデルクラスに設定し、授業設計は4名で行った。

当該科目の概要は次のとおりである。

【対象・履修者数】主に文系の初年次生、24名

【課題】2000字程度の論証型レポート（3つのテーマから自分の問題を1つ設定）

【ループリックの使用方法】直接評価、間接評価

短期的な学修到達目標を設定して学修目標を明確化するために、全15回の授業内容を5

回ごとにⅠ～Ⅲの3項目に分けた。各項目の内容は、「Ⅰレポート作成の基本を学ぶ」「Ⅱ情報検索とアイデアの構築」「Ⅲレポートを書く」である。Ⅰでは、ルーブリックの観点に対応した内容構成とし、Ⅲの段階でルーブリックを学生に配付し、相互推敲などの間接評価を実施した。なお、最終評価は、担当教員による直接評価である。

4. ルーブリック作成

クラスルーブリック作成の前段階として、作成者間でアカデミック・ライティングの評価観点に関する共通認識を持つことを目的に、コモンルーブリックの素案作成を行った。作成にあたっては、1回につき2時間程度の合議を5回設けた。また、サンプルレポートは、文系・理系それぞれ上位年次・下位年次のレポート計約300本を対象とし、うち30本を作成者4名が検証した。検証期間は約2週間である。

以上の過程を経て、モデルクラスでのクラスルーブリックを作成した。作成にあたっては、1回につき2時間程度の合議を3回設けた。また、今後のクラスルーブリック作成の全学的な展開を鑑み、尺度の設定(4段階)と記述語の統一をはかった。

観点は、「A 教員の課題意図の理解」「B 資料の取り扱い」「C 自分の立場・意見」「D 論理構成」「E 学術的な作法」「F 日本語の表現」の6項目である。E・Fは、合議の結果、該当項目数に応じた段階設定が実情にかなっていると判断し、記述語による段階的な学習成果の測定方法ではなく、チェックリストを併用した。また、記述語に関しても、基準となるレポートの抽出と、そのレポート作成にあたっての教員指示を参考にし、抽象度が低くなるよう心がけた。

作成した素案をもとに、当該科目の論証型レポート10本を、作成者以外の教員4名に依頼した。評価者は、専任教員2名、特任教員1名、非常勤講師1名、その中で文章作成の科目を担当した経験がある者は2名である。評価者4名は相互に相談することなく独立して、約2週間かけてサンプルレポート10本を評価した。検証を経ての改善点としては、次の2点が挙げられた。①Dの観点をより具体的な内容にすること、②チェックリストを文章化し、よりわかりやすく訂正すること、である。改善をもって完成したクラスルーブリックをモデルクラスに配付し、相互推敲による間接評価を実施した。

5. まとめと今後の課題

学習効果を促進するためのルーブリック活用にあたっては、授業カリキュラムとの密な連携が効果的である。今回のライティングに関するクラスルーブリックの作成は、チームティーチングでの質保証を目指し、次年度の当該科目において複数クラスでの使用を視野に入れたものである。その結果、同一ルーブリックを使用した直接評価・間接評価に関して、今回の間接評価では、尺度において平均2段階の尺度向上が確認された。その一方で、活用法から、チェックリストの位置づけなど今後の課題も明確となった。

参考文献

- 松下佳代(2007) パフォーマンス評価—子どもの思考と表現を評価する, 日本標準
- 松下佳代(2014) 学習成果としての能力とその評価—ルーブリックを用いた評価の可能性と課題—, 名古屋大学高等教育研究, 第14号: 235-255
- 高浦勝義(2004) 絶対評価とルーブリックの理論と実践, 黎明書房
- 中央教育審議会(2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf